IMAJ ニューズ
国際MRA日本協会機関誌
NO.20
発行年月日　昭和55年1月1日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL. 03－374－7600
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

1980年代を告げる「ギャップを埋める」展示

“ギャップ”の展覧会はジャンル別に展示された。

ジンバヴエ・ローデシアの人種対立は種族間の競争が黒人と白人間の戦争を更に複雑にしていた。産業国間の不協和音は、1国内の利益団体間のギャップの投影でもあった。開発途上国間のギャップは南北間のギャップよりも大きいと自嘲するアフリカ代表の発言もあった。

労使の対立は10国10色、夫婦の対立も10人10色にみられた。全てが古くもあり新しいギャップであった。

“ギャップ”の展覧会を彩った色も3色に収束された。正直さのギャップ、態度のギャップ、そして思考と行動のギャップと全てが“人のギャップ”である。

“ギャップ”を埋めた体験のある人は素直にそれを披瀝し交換し合った。“ギャップ”を埋めたい人は各国の人と共に実験をした。

“ギャップ”を埋める解答がコーのMRA世界大会で展示され、家庭、職場、国へと持ち帰られた。

人が変わるとき“ギャップ”は埋まる。誰もが“ギャップ”を埋める玄人になりうる。

コーで作られる“かけ橋”が1980年代を告げている。

"ギャップ"を超えて

——ローデシア停戦合意までの動き——

生れてから今日まで、その大半をソビエト、キューバ、東ドイツでのゲリラ訓練と国内でのゲリラ活動と牢獄生活で過したという若い精悍な黒人議員が、そのたくましい両手を差し出したとき、その手を力強く握りしめたのは白人議員で、彼の瞳にはためらいと希望の交錯した不退転の決意といったものが溢れていた。この二人はジンバウエ、ローデシアのムゾレワ首相（黒人）とイアン・スミス前首相（白人）の意を受け、この日コーで初めて握手を交わしたのである。

この白人議員はアフリカ五世代目、多くの白人議員と同じ農民である。二重の高いフェンスと手投弾よけのネットを家の周りにめぐらし機関銃をもった傭兵を擁しているのがこうした白人農民の日常である。彼は云う。

「ジョン・ケネディはアメリカ三世代目で堂々とアメリカ人を名乗った。決してアメリカ在住のアイルランド人ではない。私は既に五世代目、ヨーロッパ人でも白人でもない。私は正しくアフリカ人以外の何者でもない。たまたま白い皮膚を持ったアフリカ人である。そして黒人と共にこのアフリカの責任をとっていきたい」と。

愛国戦線（マガベ・ウコモ）の元黒人議員（元閣僚）は、コーに到着したとき、まず周囲を用心深く見まわし、レマン湖を見おろす神秘的な森に本能的な警戒の眼差しを送った。やがてコーの無限の静寂と開放的な無防備さが彼に信頼の居心地を与えるのだった。

一九七七年から始まったコーの「世界政治家会議」には各大陸から「良心の内閣」を目指す政治家たちが続々と集まった。十七年に亘る内戦の結果、解決を果したスーダンの元文化情報相、独語圏の南チロルでイタリア語系の人びととの橋渡しをした上院議員など、信頼と勇気をもってギャップを埋めた実績のあるステーツマンの多数がジンバヴエ・ローデシア各三派からなる政治家を囲んだのである。

この日に逆のぼること約二週間前、ザンビアのルサカで英国連邦首相会議が開催された。六月の東京サミットを後にしてオーストラリア訪問を行なった英国のサッチャー首相は記者会見の席上、ローデシアに対する経済封鎖解除を表明し、アフリカ諸国の批難の的になっていた。

当時、学生時代にMRAのブックマン博士の薫陶をうけた現在のフレーザー濠洲首相の外交特別補佐官は、首相に先がけてザンビア向うというガイダンスをもった。禍を福に転ずるため平和の使者になった彼はマレーシア、インド、英国、ナイジェリアを経て現地に向った。各国政府、外交官との間に長年培ってきた信頼のパイプをたどり、それまでの各国の利害や行きがかりにとらわれず大局的に「何が正しいか」を目指して相互理解の土壌作りに全力を注いだ。そしてサッチャーの声明に硬化したアフリカ諸国を建設的な姿勢で会議のテーブルに引き寄せることに努力し、それはやがて見事に実を結ぶことになった。サッチャー首相が到着したとき、各国代表が息をのむ中でかつての大英帝国の首相の第一声は次のようなものだった。「アフリカの方がたと共に語り、そしてアフリカの皆さまから学ぶために私は参りました」と。

この予期せぬ謙虚さは各国黒人指導者の心を大きく開かせるものとなった。公式会議の進行中は何らの成果もなく、やがて会議決裂の論調が各国に飛び交ったが、会議の最終段階でのバーベキューパーティ（これは歴史に残るものとなった）の最中、

コーで談笑するアレック・スミス氏とアーサー・カナデリカ。幾度となく二人で演壇から語りかける姿は今日の「ジンバブエ・ローデシア」を予言したデモンストレーションとして各国の人々に強い印象を与えた。

この特別補佐官はホテルで最も悲観的態度を示した英国一流紙二社の論説委員に会議成功への努力と見通しを説いていた。

翌日、ロンドンでは一転して合意可能のニュースが流れ、会議はドンデン返しの成功に終った。英国で九月十日よりジンバヴエ・ローデシア各三派代表と英国との憲法会議が開かれることで英国連邦首脳も合意するに至ったのである。英国紙は、この会議を成功に導いたのは、これらオーストラリア代表団のひらめきのあるチームワークの努力の賜物と称賛した。

六月、ノルウエーでアレック・スミス（イアン・スミス前首相令息）の結婚式が行われ、七月、この新しいカップルがコーに姿を現わした。

アレック・スミス氏は、学生時代に麻薬に手を染めるなどスミス首相の頭痛の種であった。不肖の子のアレックは南アフリカで投獄されたがそこで宣教師を通して信仰を見出し、父親に過去の反抗と不行跡を詫び、更に黒人に対する自己の言動も謝罪した。そして黒人のゲリラキャンプにも訪ねていった。一九七六年、ジュネーブ会議でメソジスト教会の黒人牧師アーサー・カナデリカとの間に強い友情が結ばれていった。カナデリカ師はムゾレワ師のUANC（統一アフリカ民族評議会）財務担当評議員だったが敢然と職を辞し一党一派に偏せず黒人各種族間の橋渡しをすることを天命と受けいれてアレックと手を携えて闘った。共に演壇にたち、共にゲリラキャンプを訪ね、自らの過去の非を告げ、相手に賛辞を与えるなどして二人の祈りは、国民の一人一人の平和への祈りを誘っていった。一九七八年十二月八日、アーサー・カナデリカは首都ソルスベリー郊外で強硬派ゲリラによって暗殺された。

一九七九年十二月十二日、英国のソーム卿がソルスベリーを訪れ、十四年ぶりに英国は経済封鎖を解きソーム卿を提督とする管理体制で総選挙が行われる。ロンドンでの憲法会議は実に三ケ月を費し、キャリントン外首の粘り強い手腕は高く評価されたがそこには各派間の信頼の輪をつくり「何が正しいか」による解決を訴えるMRAチームの日夜にわたる姿がみられたのである。

十二月二十日、愛国戦線も英国提案の停戦協定に調印し、七年に亘るゲリラ戦争に終止符がうたれた。

コーの「世界政治家会議」を経てロンドンに向った議員は四名であった。愛国戦線派の議員でコーについたとき、最初はレマン湖を見おろす森に危惧の眼ざしをやった黒人は、コーを発つときにこう言った。

「国民一人一人は平和を望んでいるのに、指導者同志は争いを好んでいる。自分のロンドンでの役割は、コーの雰囲気をそっくり持ち込むことだ」と。

ムゾレワ首相はコーに送った黒人議員に対し「いま必要なのは黒人だけによる平和でなく、ローデシア国民全員の平和である」と語っている。

ギャップを埋める闘いは一人一人の態度と動機のチェンジを必要とする。そこには愛に満ち、勇気をもった人びとが信頼を築きあげていく。ギャップを埋める人々の輪が一九八十年の扉を開いていく。（藤田幸久記）

杉山取締役を代表に、本年で第三回目を迎える東芝労使代表

一昨年以来終身雇用制、企業内組合等についての質問が目立ったが、今年は福利厚生、組合の社会的責任、日本の第三世界への貢献等、質の高い地についた交換が行なわれた。

中華民国は民主主義の均富社会に邁進する

一つの理想的大同世界の初歩的実践

何　應　欽

一、前　言

私は友人各位と共に、孔子の大同世界の理想を研究し、大同世界が公正無私の世界であり、我われの世界道徳再武装運動と同様の道徳を基礎とする理想世界であると強調した。同時に私はまた大同世界の内容は、政治思想・経済思想と社会思想を融合した総合性の構想であり、我々の国父、孫中山先生と先総統蔣公が半生の精力を以って、この理想実現のため努力された旨を説明した。本日、私はこの理想が中華民国の台湾に於いて実践された初歩的成果、特に我われが民生主義の均富社会に邁進している途上に於いて、貧富の差をなくし、貧富の間の矛盾と融たりを解消するためになした努力と成果について、若干の具体的事実をあげ、友人各位に重ねて紹介したいと思う。

中華民国は、一九四九年中央政府が台湾へ移転して以来、孫中山先生の遺教と中華民国憲法の規定に則り、統治に精勤、積極的に民生主義の土地政策と経済政策を推進した。三十年来実施の結果、土地改革に成功しただけでなく、経済も迅速に成長を遂げ、国民所得は大幅に高められ、人民の生活は不断に改善されて、貧富の差が過去に比して著しく縮少し、漸次均富の目標に邁進して、開発中国家の模範として賞讃されている。

二、民生主義の経済背景とその要義

民生主義の経済制度は、資本主義或いは共産主義の経済制度でもない。これは孫中山先生が五十年前、資本主義と共産主義の欠点を認め、その長所と短所を取捨選択し、中国古来の大同社会「天下を公となす」の理想と、更に自己の主張を加えて創立された一種の極めて完全な経済制度である。

資本主義は自由経済制度を主張し、私有財産を実施、企業の自由及び市場の価格機能を守っている。人民はこの制度下にあって、刺激と鼓舞を受け、智能をつくして生産の効率を高める面でその卓越した功能を発揮するけれども、分配方面に於いて財富が少数の人に集中する弊害を免かれないのである。

共産主義は私有財産制、企業の自由と市場価格機能制度の廃止を主張し、あらゆる生産工具、例えば工場、機器、土地及びその他の資源は一律に徴集して国有とし、生産から交換、分配乃至消費に至るまで総て政府の管制下におく。このように、利潤の鼓舞に欠け、人民は生産の意欲をなくして生産効率の低下を導くのである。それで共産主義は「均」を標榜しているが、その結果はただ「均貧」あるのみで、決して「均富」ではなく、人民の要求を満足させることができないのである。

民生主義は資本主義と共産主義の弊害を防止し、その目的は一つの繁栄安定した均富社会―大同世界の理想社会を創造するのである。その特点は

㈠　私有財産制を保存して生産を鼓舞する……民生主義は私人の企業経営を認め、私有財産制度を保存する。故に資本主義の人民が生産に努力することを鼓舞する優点を有する。

㈡　平均地権と資本節制によって財富分配の不均衡を防止する……私有財産制は若しこれを制約しなければ、必らず資本主義と同じように、社会財富の分配不均衡の程度が日増しに厳重となる。それで貧富の差の拡大を防ぐため民生主義は、平均地権と資本節制を主張している。平均地権の方策は、農村に於いて「耕す者はその農地を持つ」を実施し、都市に於いては「地価の自己申告、規定地価による課税、規定地価による買上げと値上りは公に帰する」実施した。節制資本は即ち私人の経営に適さない或いは独占性の企業は、

私人の経営を認めないことによって、少数の人が社会の財富をろうだんしないようにしたのである。

㈢　国家資本を発達させることによって、私人資本の調節管制をする……民生主義は私人資本が過度に集中し、資本形成に影響するのを避けるため、個人の経営に適さないもの或は独占性を有する大企業は、均しく国家が経営することを主張し、私人のろうだんを防止することにした。しかし民生主義のいわゆる節制資本は、資本の累積を反対するのではなく、また私人の資本を制限するのでもなく、人民が国家経営の企業に参加することを許さないのではない。そして私人資本を国家企業に投資することを奨励して、国家資本の発達を計るのである。要するに私人資本を政府が調節管制することによって、その奇形的発展を防止し、大富階級が生れるのを防ぐのである。

㈣　市場価格の機能及び企業の自由を守る……共産主義の市場価格機能及び企業の自由を廃棄することによって、おきる重大な弊害を避けるため、民生主義では市場価格機能及び企業の自由を守り、自由経済の長所を採って生産の投資を促進し、資源をして最も有利に利用できるようにするのである。

三、民生主義経済政策の実施

この三十年来、中華民国の台湾では、先総統、蔣公及び蔣経国総統の指導の下に、民生主義の経済政策を貫徹し、経済の加速的発展を促すと共に、人民の生活水準を高め、安定と福祉の均富社会に邁進している。その実施した経済政策の主なものは次の通りである。

㈠　耕す者はその農地を持つ政策の実施……この主旨は業佃制度を廃止し、農業生産の向上、農民生活の改善と農村経済の繁栄を図る。これは二つの段階に分けられている……

(1)　公有地の払下げ―一九五一年より実施され、払下げを受けた農民は、地価を十個年で分納する。一九七七年迄に払下げた面積は十三余万ヘクタール。受益農家は二十八万六千余戸。

(2)　私有耕地の払下げ―一九五四年より実施、各地主は水田二、九ヘクタール、畑五、八ヘクタール保留される外、その超過部分は政府が買上げた後、これを小作農に払下げる。総払下げ面積は十三万九千余ヘクタール、受益農家は十九万五千戸。

以上の二項によって約五十万戸の農家が、小作農として自分の農地を有するようになったのである。

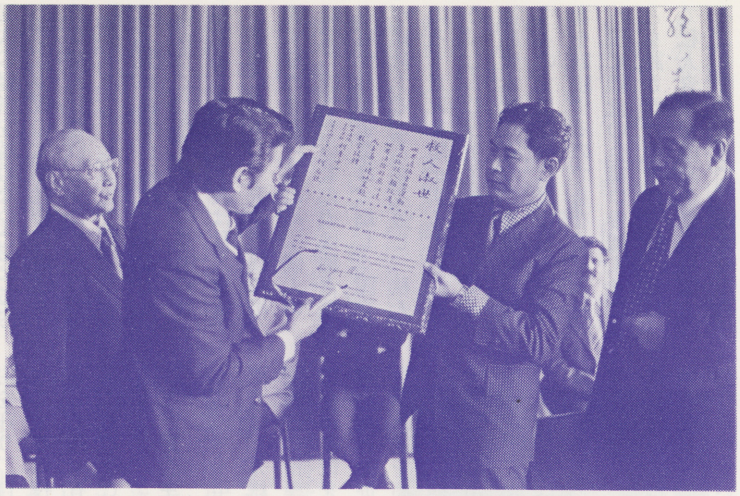
㈡　平均地権の実施……人口の増加と商工業の繁栄による土地の投機を防止し、土地の改良による収益を社会大衆に還元する。一九五六年から一九六六年まで実施した地権平均の面積は、十七万七千余ヘクタールに達した。一九七七年全面地権平均条例を制定し、都市と農村を分たず、全面的に払下実施した。その面積は一百七十三万八千余ヘクタールに達し、一九七八年の一年間徴収した土地税と土地増値税の総額は、新台幣一百二十七億元以上、これを米ドルに換算すると約三億五千余万ドルとなる。この収入は均しく育児、養老、救済、済貧、国民教育及び公共施設などの社会福利事業に用いられ、一般社会大衆の生活改善に極めて大きな効果をあげている。最近十年間我われは、曽って友好国家の委託を受け、土地改革に関する訓練をなした従業人員が一千余人、またアジア、アフリカ及び中南米の諸国家へ農耕隊を派遣し、我われの農業技術を提供指導した。これによっておわかりのように、我われの土地改革の成功は、既に自由世界の良き模範となっている。

㈢　私人資本の節制と国家資本の発達……政府は民営企業と中小企業の発展を補導すると共に、特に直接税の徴収を強化し、直接税の比率を逐年増加した。そして低所得者の私負担を適宜軽減し、一歩一歩と租税政策の社社目標を実現して、租税の徴収によって国民所得及び財富の分配を調節し、均富政策の前進を促がしたのである。国家資本の発達については、凡て国防、交通、電力等の国家基本建設及び公用事業は政府経営にした。近年来完成した十大建設―高速道路、中正空港、台中港、蘇澳港、鉄道の電気化、北廻り鉄道、造船所、製鉄工場、石油化学工業、原子力発電所など、更に十二大建設を積極的に計画して、六年経済建設計画と綜合開発計画を実施し、台湾地区に於ける全ての建設が飛躍的に発展して、国際人士の一致した称賛を得ている。

㈣　国民所得と貧富の格差……中華民国の経済が迅速に発展し、人民の生活水準が高められた。統計によれば、一九七八年の国民総生産は新台幣八千八百九十三億六千四百万元、米ドルに換算して二百四十億余ドル、実際経済成長率は十二、八％の高きに達している。一人当りの国民所得は一千三百四米ドル、この数字を一九五三年に比較すると、七倍近くの増加となる。貧富の差については、台湾の家庭総戸数から百分の二十の比較的高所得及び、比較的低所得者を抽出して比較すると、高所得者家庭の収入が低所得者家庭の収入に占める倍数が、一九五二年の十五倍に対して、一九六四年は五、三倍に下り、一九七八年に於いては四、一八倍に下っている。国民貯蓄率は一九七八年既に百分の三十を超過している。これらは中華民国の経済発展、国民財富の増加を示していると共に、貧富の差が少なくなり、均富の目標に邁進していることを表わしている。

㈤　労資の合作、労資間に断絶がない……台湾地区で工業が発

展して以来、社会構造が漸次変化した。労働者人口が急激に増加し一九七八年の労働就業人口は、総就業人口の三九％に達し、一九七七年の受雇者は三百五十九万四千人に達している。そして労働人口は増えたが、政府が実施した労資合作の政策よろしきを得て、労資間に断絶がなく、未だかつてストライキが発生していないのである。これは工業化国家にとって不思議なことである。台湾地区では労工福利と労務保険が全面的に実施されて、現在の加入人数は二百十万人、家族の受益者と合せて八百数十万人となり、これが社会安定の大きな力となっている。それだけでなく台湾地区の失業率は百分の一・六七、世界標準の百分の三を下廻っており、アメリカの百分の六に比べて大きく下廻っている。これは経済衰退時期に於いて、また一つの奇蹟となっている。民間が裕福であるので児童の就学率も百分の九九・六の高きに達している。



満90歳を迎えた何応欽氏。第二次大戦終戦時戦艦ミズーリ上で三軍司令官として日本降伏の軍刀を受け取る。連合軍による日本分割断呼反対、中国領に於ける日本軍将兵の無条件帰還、対日賠償要求せず、という方針を他の指導者と共に決断したことは有名。その軍刀は、平和貢献に対する努力に鑑みフランク・ブックマン博士に贈られ、現在その生家（アメリカ）にある。

四、台湾地区と大陸地区人民生活の比較

中央の貧困と落後、これはいわゆる「四つの近代化」が失敗した後、明らかに世人の前に暴露された。中共の「主席」華国鋒は、六月十八日第五回人民代表会の第二次会議に於いて、中共の貧困と落後は「短時間内に解決できるものではない」と率直にこれを認めた。そして「経済管理体制と企業管理体制は明らかに欠陥がある」と承認したのである。中国大陸の人民は台湾地区の繁栄富裕の消息を聞き、「台湾に見習え」のスローガンを叫び出した。我われが中華民国の台湾地区と大陸地区人民の生活状況を比較する時、どちらの政治体制が人民に受け入れられるか、自らおわかりと思う。

五、証明と啓示

中華民国は台湾地区に於いて、三民主義の均富政策を実施し、国家の近代化、工業化を推進した。世界銀行一九七八年出版のATLAS資料によれば、中華民国は世界上人口一百万以上の国家中、三項目の順位から見て、中華民国経済の国際上占める地位は、極めて重要である……。

一九七七年一人当り国民所得
一、一八〇米ドル　世界の第四七位

一九七七年国民総生産額　一九六億米ドル　世界の第四一位

一九七〇年―一九七六年平均経済成長率百分の八・六　世界の第十二位

そして中共はこの資料の中で、一人当り国民所得は第八十三位、平均経済成長率は第三十四位であり、中華民国に遠く及ばないのである。

一九七八年スイス銀行が、国民所得額一千二百米ドル以上を標準に編集した、世界最富有の五十三国家に於いて、中華民国は一、四一二米ドルで第四十四位を占め、世界銀行の前一年の統計から三位上昇している。本年七月二十五日、キリスト教科学箴言報は「明日の大国」の特別記事で、中華民国を世界上の十二軍事大国の一に対し、中華民国と韓国、香港、シンガポールは、現有工業先進国に挑戦する「明日の強権」であると指摘し、中華民国の政府と人民に、大きな興奮と鼓舞を与えた。特に中華民国人民が特に注目すべきことは、キリスト教科学箴言報が、中華民国及びその他三国と日本は「孔子の工作倫理」を共有し、「孔子の工作倫理が、彼らをして世界工業先進国と肩を並べさせた推進力である」と論評している。それは孔子の工作倫理が、西方の近代資本国家を建設した「キリスト教の工作倫理」と同じであり、それは勤労、倹約、効率及び敬業の美徳である。キリスト教科学箴言報は、孔子の大同世界と、孫中山先生の民生主義の精神を充分理解していないのに、この善意ある評価に対して、中華民国の政府と人民が、この世界大同と民生主義の崇高なる理想によって、難苦に耐え、反共復国のために奮闘する国家として、更に繁栄、更に幸福な均富社会に到達することを信じてる。

愛によって行うコミュニケーション
愛によって築くコンセンサス

日本通運株式会社　副社長

赤城　海助

去る五月、日本において、「世界のギャップをうめる産業界の役割―正しい解決の前提条件としての相互信頼―」をメインテーマとして、第三回の国際産業人会議が開催されましたが、幸い、その最終日に出席できたわたくしにも、発言の機会が与えられました。その数日後、ハインリッヒ・カラーさんの訪問を受け、この美しいコーへご招待いただくこととなりました。そこで、今回、当地で、産業人会議が開催されるにあたり、わたくしは、喜んで飛んでまいった次第であります。

わたくしは、このコーにおける会議への参加は初めてでありますので、まず、これまでに至るわたくしの精神生活上の体験について、若干、お話しさせていただきたいと思います。

わたくしにとって、ここ十数年は、家庭人としても、産業人としても、まさに、激動の期間でありました。この間、様々な葛藤、苦難を経験する過程において、ある時期から、わたくしの内面に、大きな精神的変化が生じたのであります。それは、つぎの二つの啓示が契機となったと思っております。

その一つは、わたくしが、十年前、五十五才にして、家族五人中最後のクリスチャンとして信仰を与えられたことであり、いま一つは、ごく最近のことでありますが、書物を通して、ブックマン博士の言葉に接しえたことであります。

わたくしは、十数年前、会社内の人事問題や、労使関係上の問題に、大変悩み、苦労しておりましたが、はからずも、神の導きをえて、家族と共に教会に行き、聖書を学ぶようになりました。そして、天地の創造主であるまことの神を知り、神の声をきくことによって、それまでの強すぎる自我、不遜な私自身が徹底的に打ち砕かれることになったのであります。特に、聖書のことば、

「主を恐れることは、知識の初めである。愚か者は、知恵と訓戒をさげすむ。わが子よ、あなたの父の訓戒に聞き従え。あなたの母の教えを捨ててはならない。それらは、あなたの頭の麗しい花輪、あなたの首飾りである。」は、わたくしの胸を強くうちました。

わたくしは、それまでの自分の生き方を反省し、悔い改める覚悟をしたのです。そして、人生で大切なものは、聖書にある如く、信仰と希望と愛の三つであると確信し、そのうちで最も大いなるものは愛であることを学びました。

神は愛なりといわれますが、まことに、「愛は寛容であり、情け深い、ねたまない、うらみをいだかない、不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない。」のであります。何とすばらしい神のことばでありましょう。このことが即ち、MRAの、正直、純潔、無私、愛という最高の精神的・道義的基準そのものであると、わたくしは確信するものであります。

以来、わたくしは、産業人として、このことを、何とか身をもって実践しようと、自らを戒めつつ、まず、従業員一人ひとりと、心の触れ合いを持つように努めることから始め、社内従業員の一体感を醸成することに努力を傾注して参りました。

即ち、全国二千余の事業所に勤務する七万余の従業員および組合幹部の人々と心を通じ合い、その将来についてコンセンサスを醸成することが、わたくしの最大の仕事となったのです。

労使間の問題を処理するにあたっても、争いをできるだけ避けて、相手の意見をよく聞き、建設的な話し合いを通じて、より良い方向に踏み出すべく、懸命の努力を続けました。

このような苦労は無駄ではなく、おかげさまで、わが社の労使関係も、互いの理解と納得による話し合いの精神が実を結び、年を追って正常な、希望にみちた姿に近づきつつあると自負しております。

わたくしは「愛によって行うコミュニケーション・愛によって築くコンセンサス」を念願して、年に二回、全国に散在する事業所を訪れ、そこで、数百名に及び労働組合の幹部と膝を交えて、わけへだてのない話し合いを続けて参りました。そこでは、単なる論争や説得や信念の披瀝だけでなく、より賢明な決定に必要なかけ値のない正直な情報や、経営の実体を冷静にみつめる中から想定される将来像、また、より広範な経営環境に関する問題、等について、情報を伝達し、意見を交換し、相手の

話も十分に聞きながら、誠意をもって話し合いをおこなってきました。

その結果、最近では、お互いに相手の立場を尊重しつつ、何でも正直に話し合えるような労使関係ができあがりつつあり、「愛によって築くコンセンサス」に、一歩一歩近づいてきているのを感じております。

このような実践を通じて、わたくしは、自分の仕事に明るい希望が生じ、新しい意欲が湧き出るのを感じております。たまたま、このような時に、ブックマン博士のつぎの言葉に接することができたのであります。そのときには、ほんとうに、わが眼を疑うほど驚きました。そこには、わたくしの考え方、生き方が、さらに深く表現されており、今後の進み方が明確に示されていると考えたからであります。すなわち、

「人智には限りがあります。幻滅と困惑と無秩序にうろたえている現在の世界に答えを与えることが必要です。

今日の国際問題の基本には、利己心と怖れという個人的な問題があります。

これを解決するためには人が変わらなければなりません。

世界の平和は人の心の平和からのみ生まれるでしょう。

地域的な対立、経済恐慌、人種的紛争、国際間の争いに対する解答は、神の自由な精神を力強く体験することです。

最も必要なことは、神の支配です。」

また、「どうしたらよいかわからない時は、神に聴きさえすれば、道が示されるということを、わたくしは知りました。人が聴く時、神は語ります。人が従う時、神は働きます。秘訣は神の支配にあります。」という言葉です。

この言葉に出会ったとき、わたくしは、大変な衝撃を受けると同時に、深い感激が湧くのを感じました。わたくしは、この言葉に導かれて、今後も、「愛によって行うコミュニケーション・愛によって築くコンセンサス」の実践を続けていきたいと念願しております。

さらに、ブックマン博士は語ります。

「神に聴く意志をもった一団の人びとに、神は、はっきりと語ります。」

この言葉を聞いて、コーに来たいと思わない人がいるでしょうか。わたくしとしては、東芝さんのように、我社の組合幹部の人びとも、このMRA大会に、わたくし共と一緒に参加する機会が、近い将来において実現することを、強く念願するものであります。

わたくし自身も、これから益々、朝夕の祈りを通じて神との交わりを重ねつつ、神の支配の下に生き続けたいと思っております。

MRA大会に参加したこの機会を通じて、できるだけ多くの方々と語り合い、一部に、アンフェアだと誤解されている向きのある日本について、また日本の産業界について、皆様の理解を深め、相互のギャップを埋めるために、わたくしなりに努力したいと考えております。皆様のご批判、ご忠告も、その過程で是非賜りたいと考えます。

（一九七八年。コー、マウンテンハウスにて）

東芝労働組合
姫路支部委員長
後藤光弘

MRA全国大会開催！

1979年度MRA全国大会は10月20日、東京、神宮外苑の日本青年館で来日中の国際代表を迎えて盛大に開催された。この日コーの世界大会に参加した人びとの報告の中からお二人を紹介します。

私たちのメンバーは東芝とそのグループ会社からなるチームでしたが、共通の悩みは語学に弱いということでした。私自身も参加できる楽しみと共に不安が最後まであったのですが、マウンティンハウスに滞在した期間中はさした不便を感じないで終ることができました。このことはあの会場の中にあった皆の善意と思いやりと親切、そんなものが一杯に溢れていたからだと思います。世の中の様相はまさにきびしいことばかりですが、あの思いやりと善意が拡っていったら世の中はもっと明るいものになるだろうと、それが私の一番の感想でした。

それから私たちは出発の時から聞かされていたことですが各国の人びとが日本に対する関心が深いということでしたが、行ってみて誠にそのようだと感じました。然し日本に対する関心とは日本の製品がすばらしいとか、日本の経済的発展とかでなく、人びとのほんとうに知りたいことは、日本人が何を考えているのか、日本人の心とはどういうものなのかということに深い関心があるのだということを感じました。ある外国人は「今まで日本人がこわかった」とも言ってました。私たちはこれか

らももっと日本人の考え方なり、心なりを世界の人びとに知ってもらうために努力すべきではないかと思った次第です。

またこれとはうらはらに、この広い世界を深く知っていくべきとも感じます。自分は世間が広いという自負心をもちがちですが、それは所詮、日本という尺度の中における世間の広さであって、世界というものさしでみたときに私たちはほんとうに世界を知っているのだろうかと深い疑義をもった次第です。

ある日の食事のとき、南アフリカの議員さんと一緒にテーブルを囲んだのですが、そのときそのひとがこんなことをいいました。

「私はここで恵まれた食事をいただいている。しかし私の国では多くのひとが一日に一食の食事をどうして得ようかと悩んである。そういうことを考えると私は幸せすぎる」と。

私のもっていた南アフリカという国のイメージはもっともっと富める国でした。いま日本が自国の繁栄のみを考えて全力をあげていくべきか、静かに世界という舞台の中で日本が何をいまなしていくべきかを考えることが大事なことではないかと。それが第二の感想でした。

終りにコーに行って私自身に何がおきたかを申しあげてみたいと思います。

私はコーの美しい景色の中で、ふと家族のことを思いました。考えてみますと毎日の生活の中で家族のことを考えることの何と少ないかとか。恥かしいことですが、考えてみますと結婚して丁度十五年目に当っていました。私はそこで考えまして私と妻との中というと偶には食事にでかけるか、買物の運転手をするぐらいのことでした。

丁度良い機会なので十五年振りに新婚旅行で歩いたコースを妻と二人で歩いてみることも良いと思ったのです。帰ってそんなことを妻に話したところ、妻にとってはMRAに参加した私の変化として大きな感謝で受けとめてくれました。

MRAについてまだ知らないことが多い私ですが、まず一番にやらなければならないことは身近かなところからの変化だろうと考えております。

私はこれからの私の人生の一つの指針として、ほどほどに接し、人に求める場合に自分自身をもっと考えていきたいというのが感想です。

東芝EMI 総務部長 北原良雄

今回の参加を通して私個人の感想を申しあげたいと思います。私は二つばかり忘れられない印象をもちました。

一つは皆さんの言われた「内なる声に耳を傾けなさい」という言葉です。

私は今まで、仕事をしている最中に、どうしても自分の我をすてきれないでいました。そして形だけというか、良いカッコをするというか、何かほんものでない姿に促われてしまうことがまま反省させられていた訳です。何かその辺のところでふっきれるものはないかと常づね思っていましたが、この言葉によって胸につかえているものが、すっとおりたように思います。それと同時に自分の周囲を変えていこうと願う場合、まず自分が変わるという言葉をきいたのですが、これも私にとっては非常に大きなショックでした。まず自分が変わる、それによって周囲も変わる。私はこのことによって非常に安心立命というか何かほっとした安心感を得ました。

この確信は私にとって大きな喜こびでしたので、余りの嬉しさにそれを伝えに河原さんをお訪ねました。東芝機械の相談役河原さんは、私が東芝に入社したころ、当時は常務取締役勤労部長でしたが、実は河原さんがこのMRAについて話して下すった最初の方でした。そのMRAに私も今回参加でき、しかも嬉しい体験を得たので、やもたてもたまらずお訪ねし、お礼を申しのべたのです。河原さんはこう言われました。「MRAはものに促われない安心できる境地が得られる。これが大きいね」とおっしゃり嬉こんで下すったのです。このことは、ほんとうに大きな収獲の一つでした。

もう一つは帰国したその夜、疲れもあってぐっすり眠ったのですが午前三時頃、目がさめいろいろ考えているうちにどうしても寝つかれないのです。私のこころを大きくしめていることは次のようなことでした。

私自身が今まで仕事と会社とそして自分自身のことばかり考えていたのではないか。自分の家庭というものを余り考えていなかったのではないか。今までは一生懸命に働らいていれば、これによって家族は自ら安泰、それでいいのではないか。そんな風に決めてしまっていたが果してそれで良いのだろうか。家内はいったいどんな気持ちでいるのだろうか。そんなことを考えているうちに二時間がすぎ、家内も気づいて目をさましたので「これでいいのだろうか」と自分の考えていたことを話しました。すると家内も「実は私もほんとうに幸わせとは思っていませんでした。前から考えていたことですが、できる限り私も家庭をでて積極的に働らいてみたい。そうした働らく場がないものか、何かそうしたチャンスはないかと、今までずっと悩んでいました」と打ちあけてくれました。私はこの話し合いを通じて、「自分が浅はかであったこと。自分は結局、家庭をスポイルしてしまっていたのではないか。家内だけでなく子供にも影響を与えていたのではないか」とつくづく感じさせられたのです。

そしてこれからは出来る限り仕事だけでなく家庭を通じて社会とのまじわりとつながりをもっていきたいと考えました。

■第二回関西ＭＲＡ秋季大会■

「ギャップを埋める」を熱心に討議した

十月二十七・八日の両日秋晴れの六甲山麓住吉研修所において第二回関西ＭＲＡ秋の大会が開かれた。

オーストラリヤからスタンリー・シェパード夫妻、ロバート・ウッド君、マレーシヤからチャールス・ウイー君をはじめ、東京、岡山、九州など各地からのゲストを迎え、静かな環境にめぐまれた中で熱心な討議が行われた。

テーマは「ギャップを埋める」第一日目の全体会議では海外のゲストおよび最近あらたにスイス、コーの大会に出席した方々、オーストラリヤのスタディーコースを終えて帰られた方などから今世界中におこっている問題、そしてそのギャップを埋めるためのＭＲＡのはたらきについて情報を提供いただき、そのあと二日間にわたる五つの分科会で充分つっ込んだ話合いが行われた。最後の全体会議では代表的な所信発表が行われ、まず自分から決心してチェンジの体験を得、その確信を隣人に伝え、大きくＭＲＡの輪をひろげて、世界の再造に力を尽すことを約束した。

ゲストの方の中には二十年前にＭＲＡに出会い、すっかり忘れていたが今回の参加を通じてふたたびその灯を大きく燃やし、共に歩むことを誓って下さった方々もあり、大会の意義の大きさを再認識した。

多くの貴重な所信が述べられたが、その一部をご紹介する。

足立憲昭（ジャスコ）職場では前進あるのみで仲間同志ふりむく機会もない程忙しい。サービス業というものが本当に世の中に奉仕出来ているか批判ばかりしてきた。昨年からＭＲＡに参加、正直に生きようと決心し、まず職場のごみをためらいなく拾うことからはじめた。吾々の仲間の中にたまったほこりを払い、心の中の美しいものを堀り出す努力をしたい。

市座久子　オーストラリヤスタディーコースから帰り、こんなに早くシェパード夫妻に会えてうれしい。ルームメートのパプア、ニューギニヤの女性に異和感を抱いたが、あまりにも素朴で純粋なのに心うたれた。自分がいかに打算的で利己的かに気付き改めることを教えられた。かけひきのない純粋さが人の心をうつ。

清野　正（東芝）三年前から高瀬専務が共鳴し、すでに三十六名がコーに出席した。労使が胸襟を開いて語り合う場としてＭＲＡが役立っている。

梅原志朗（政策推進労組会議）人と人とのふれ合いを通じてよろこびを感じている。労組が物取りでなく、相手の立場に立って考え新しい力をつけてゆくことに努力したい。

ロバート・ウッド（オーストラリヤＭＲＡ）関西は民間外交、草の根外交のさきがけの地として有名であり、これから先もそうなることを信じる。インド、パンチガニーのリーダーシップ養成コースで、一青年が語ったが、彼は大学でのカンニングの不正に気付いて学校側に詫び、規律委員会から呼出しをうけた。放校を覚悟したが、逆にどうすればカンニングを無くすることが出来るかの相談をうけた。体験を活かして劇をつくり、ボンベイの各学校で上演した。グループに日本の女性一名が加わり、立派な大使の役割を果している。こうした女性に参加してほしい。正しい指導者を養成し、民主々義の弧島となっているインドを守る努力をしている。

野村一雄（住友電工）理論的に考えた結論のみを相手に押付け、過程を説明し説得する努力に欠けていた。人に対する思いやりをもっと勉強したい。海外勤務で外から見た日本は非常に閉鎖的で奇異にうつる。企業がせめて難民の受入れについても積極的に手をうたねばならぬ時機ではないかと考える。

古沢峰子（日濠協会）台湾から引揚げ、祖国日本の再建と人類の平和をねがってきた。オーストラリヤの人達の立派な人柄に接し、この方達との交流こそ日本人にとって必要と考え日濠協会を創設した。アーマーを訪れる機会を得たが、参加の皆さんが実に明るく前向きに生活しておられるので頼もしく思った。ＭＲＡの精神と協会の理想とが一致しているので益々夢がふくらんでいる。

高岡政一（滋賀県日野町）十一年前町会議員当選、絶頂にあった時交通事故を起してしまった。ばく大な補償を要求され全く自分の居る場所がなくなってしまった。謝罪におもむいても、結局自分や家族がこれから先どうなるのかしか考えられなかった。そんな時二十二年前マキノで学んだＭＲＡのガイダンスを思い出した。生涯かかって償いをする決心をして心からお詫びしたところ、先方が要求を撤回するという奇蹟がおこった。以后家族同様につき合っていただいている。

チャールズ・ウイー（マレーシヤＭＲＡ）先進国での不正、独裁に対してき然たる態度が必要であり日本の役割は大きい。どの方向に進むべきか模索している開発途上国に方向を与え、

物資のみでなく精神的道義的な示唆を与えてほしい。人格を無視したやり方や自己の満足のみ考えないでほしい。日本からは技術力と共に勤勉さや個人主義に対する考え方など学ぶことが多い。故国に帰ってマレー人、インド人とのかけはしになろうと決意している。どうかご協力をおねがいしたい。

石井統一（ダイエー）英会話の勉強をと考えてミーティングに参加してきたが、MRAそのものは良く判らなかった。藤田、長野両フルタイマーと昨夜遅く迄、フルタイマー自身の将来計画や信念など具体的に尋ねてみた結果、少し判ってきた。MAAは人生に活力を与える酵素やビタミンのようなものだと考えても良いことを学んだ。弟との不仲を解決するヒントとしてまず自分から弟に謝ることをすすめられ、意を決して手紙を出すことにした。

小川圭一（九州電気工事）年令を考えていては何も出来ないことに目が開いた。教育者として四十年、多くの教え子や同僚がいるので機会ある毎にMRAについて語りつぎたい。九州（福岡）MRAグループとの交流もよろしくおねがいしたい。

シェパード夫人（オーストラリヤMRA）スタディーコースには関西から四名参加、関西の名はオーストラリヤで有名になっている。文化や暮しは夫々の国で異るが、人の性格そのものは変らない。いかりやしっとなど同じ感情をもっている。感情に対して正直になったとき本当の友情が生れる。スタディーコースでは如何に相手に思いやりをもって生活してゆけるかを学ぶ。私は六才で父を失い、それが心の傷となり、仮面をつけ、誰からもこれ以上傷つけられまいとして過してきた。私に対して正直になることを教え、思いやりをもって接してくれた人達によっていやしを得た。MRAは活動でも団体でもなく生活の質である。傷をうけ入れ、いやしを見出したとき人生の解答を得る。女性はこのことについて大きな役割をもっている。

金森茂一郎（近鉄）会社単位の労使の話し合いはお互に考え方が判っているのでスムースにゆくが、私鉄労使の全体交渉は非常に難行する。平生からお互に相手の人柄を良く理解出来ていることが大切である。サービス業として個々のお客の要望が夫々の立場から出るので、対応に苦労するが、結局お客の立場に立って、今何を求めておられるかを第一に考えるよう従業員に話している。

住友昭郎（日本電気）コーおよび英国でMRAについて学んだ。日本人として世界の問題をどう考えるか、日本はこれからどうしてゆくべきかを問われたが、答えられなかった。両親はMRAに肯定的だが実際の生活はどうかと批判的であった。自分はどうか、身のまわりから正しくしてはどうかとすすめられこたえるものがあった。一日がかりで自分が変らなければならない点を書き出したが、二、三枚にもなった。勇気をもって友人に話し、手紙を出すことからはじめた。就職して六ケ月になるが、仕事に流されてしまわないよう、自分の仕事を中心にMRAを活かすことが出来ると確信する。決心がにぶることがあっても、一たん決意した限りは勇気をもって実行したい。

久保谷恵美子（東京）二十年前にMRAに会いブックマン博士と直接話す機会に恵まれた。すっかり忘れていたが一つだけ心の底に残っているのが誰が正しいかでなくて「何が正しいか」である。今回思い切って参加してよかった。MRAは指導的立場や社会的地位にある人のみ価値があると思っていたが、数多い主婦が実行することの意義は大きいと信じる。どう変らねばならぬかに先ず気付くこと、気付いたらどんな小さいことからでも実行すること。家族が影響を受け、世の中に影響を与える。

どんな小さなことでも家庭の中で教育出来ることをもう一度見直したい。

スタンリー・シェパード（オーストラリアMRA）準備され方方々に感謝する。今回のように感激を与えてくれた会合は数少ない。一九三〇年代におこった悲劇、オーストラリヤの日本に対する無知についてお詫びしたい。日本が他国に対して行う助けの役割を考えるとき、今述べられている皆さんの所信が大きな解答となる。オーストラリヤ人が自ら決心する機会を与えてほしい。背後から肩を叩いて「よう、うまくやっているじゃないか」といった方法でなく、愛情と執着をもって、オーストラリヤ人の意志をえぐるような助けをおねがいしたい。

相馬雪香（東京MRA）人をどう思いやるか、今日本に求められているのは日本人が心を開くことである。心を開きアジア、ヨーロッパそして世界のことを考えることが求められている。うらみは案外根強く心に宿るが、私自身も故人に対して残っているものがあった。昨夜はじめて四十年前の故人と楽しく会話している夢を見た。生死をこえた所にも人との語りかけ、心の交流がある。本当に許されたことを実感した。韓国と日本、長い歴史の中でのうらみや心の傷が未だに残っており、今生きている我々がひとつひとつ解いてゆかねばならない。カンボジヤの窮状を思うとき、今年の児童年のモットーである「わが子への愛を世界のどの子にも」を現実に心にうけとめ、日本に対する期待に答えなければならない。

住友義輝（住友電工）国際会議が世界中で月に何百と開かれており、その場では日本の産業、経済上の発展が高く評価されている。しかし本当に世界の人達に心を与えているかというと疑問である。ギャップを埋めるには、まず相手の立場に立って考える、自分の尺度でなく相手の尺度で計ることを心がけたい。四つの絶対標準にてらした神の尺度で計ることを今回コーで学んだ。昨夜来叔父の住友吉左エ門が二十年前にMRAの劇「明日への道」で百姓になって出演、大阪ガスビルでの公演の際、会社の重役の皆さんが何とか出演をやめてもらうよう強く要請したが、「これは私への神の使命だ」と舞台をつとめたのを想い起している。この研修所の場所が叔父の住居だった。会がこんなに充実したものになるとは予想しなかった。昭和二十五年来の多くのMRAの方々の播いた種が実を結んだものと心から感謝する。

兼松　正　会が終始本当に愛情に充たされていたおもいがする。ほのかな温かさと思いやりこそMRAのスピリットだと信じる。人間は常に問われている存在である。自分の生きざまの姿勢を問われている存在であり、同時に自分自身が問いかける存在でもある。ただ聞くだけでなく、どう受けとめ実践するかの問題が生れてくる。夫々に感じとられたと思うが、どうか得られたことを人々に語り伝えてほしい。

MRAの種播く人、生活の中で職場の中で、信頼と希望とゆるしの種を播く人となろう。

（54・11・10　沖田記）

MRA国際会議

会期・一九八〇年一月十八日～二十七日

会場・オーストラリヤ・シドニー市

テーマ・八〇年代へのかけ橋

われわれは橋渡しの術を学ばねばならない。

「互いの泥仕合」は分裂を増長するばかりであり、真実を不明瞭にする。互いに耳を傾け誰しもが自分自身、自分の党派、国の欠点に正直になれば、驚くほど創造的な結果が得られるであろう。

―会議をとおして―

・心がまえや態度を変えた経験を世界各国から人々が報告しあう。

・異なった人種間の尊敬、信頼をうちたてる。

・経済界に無私のはたらきを示す。